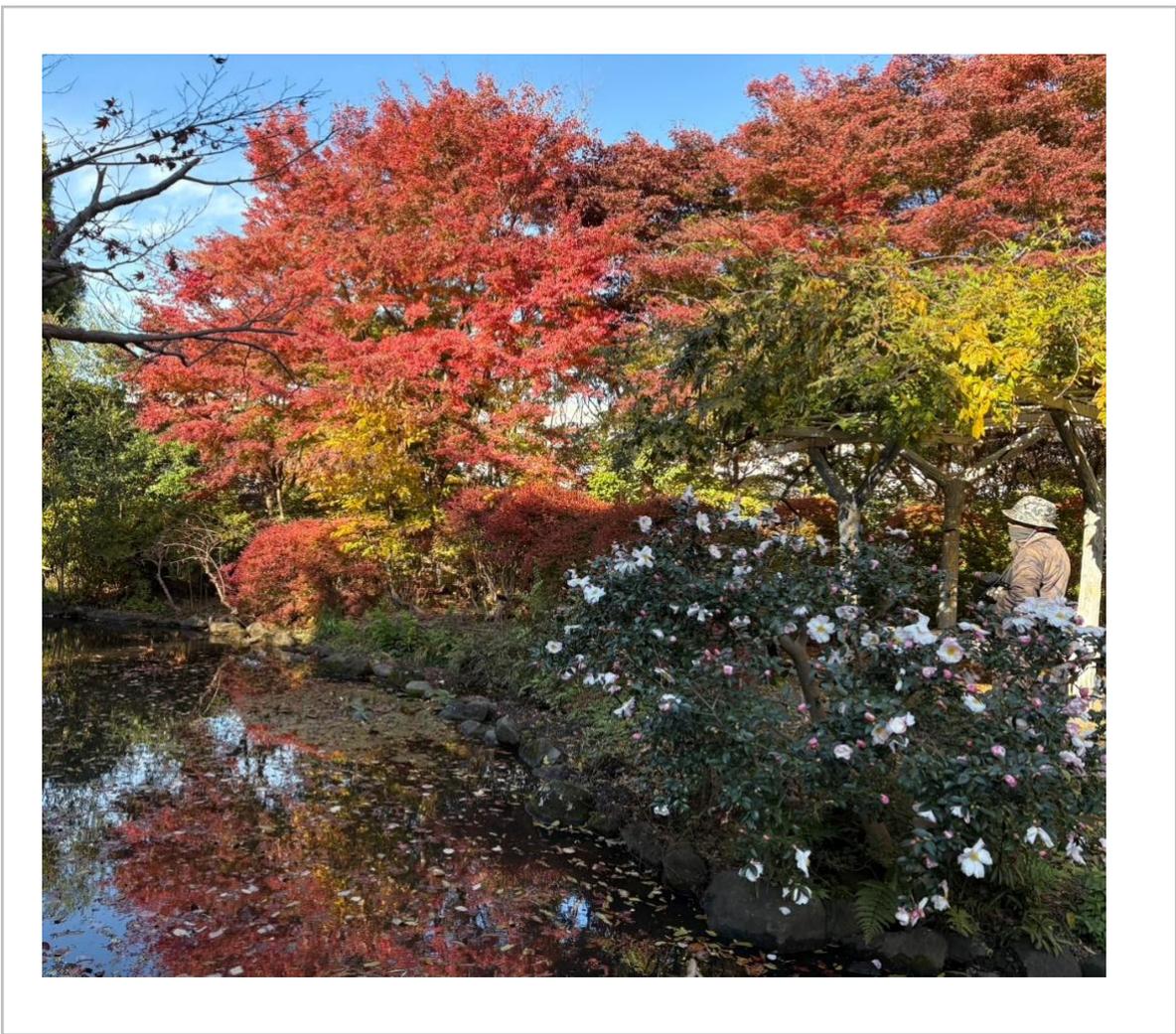


information 花とみどり

vol 79 / 2026 February



巻頭写真：紅葉とサザンカ（2025年11月撮影）

特集

急増する新害虫 ～チュウゴクアミガサハゴロモ～



埼玉県花と緑の振興センター



コバトン

所長あいさつ

埼玉県はご案内の通り、花植木の主要産地です。その歴史は古く、江戸時代にはすでに「赤山もの」と言われる枝物やチャボヒバやマキ、松などの植木の供給基地としての地位を確立し、日本の生産、流通基地としての役割を担っております。

こうした緑化産業が発達した背景としては、首都圏に立地していることがまず挙げられますが、気候によるところも大きいと言われており、埼玉県は寒い地域に適する針葉樹や落葉樹と温かい地域の常緑樹が共に育てられることから、多様な種類の花植木の生産・流通を可能にしたと言われてしています。

近年の温暖化による酷暑は、こうした

埼玉県で生育する樹木についても少しずつ影響を与えているのではないかと考えています。

また、温暖化にも関連したところがあると思われませんが、植木類で言えば、ツバキ類の大敵であるチャドクガの発生が減少し、日本では新しい害虫であるチュウゴクアミガサハゴロモが大発生するなど、病害虫の種類や発生する時期などの変化も大きいと感じています。

このように緑化産業を巡る環境は変化しています。花と緑の振興センターにおいても変化する状況に合わせて情報提供等を行い、花植木の振興を図っていきたいと考えています。

埼玉県で開催された第75回全国植樹祭の苗木9,000本を育成！

～ (一社) 日本植木協会埼玉県支部長 栗原隆治氏に伺いました ～

「全国植樹祭」は、2025年5月25日(日)埼玉県の秩父ミュージックパークにおいて天皇陛下の御臨席を賜り盛大に開催されました。埼玉県での開催は66年ぶりです。

植樹祭に使用された苗木は、陛下がお手植えされたケヤキ、トチノキ、スギをはじめ植樹祭当日用の4,000本、イベント用など合わせて実に30種類9,000本！

苗木に係る業務は、全国植樹祭史上初めて(一般社団法人)日本植木協会が県から受託され、埼玉県産を中心とした苗木の準備から調整、生産、配送は全て地元埼玉県支部が担いました。

全国植樹祭の成功に大きく貢献された栗原埼玉県支部長は、「オーダーの苗木には、協会では普段扱っていない山の樹も含まれ、かん水、施肥、消毒、除草など生産に携わった支部会員は10名。9,000本もの本数と樹種を使用どおりの姿で指定日に納めるため、管理には細心の注意を払うなど皆苦心したが、契約した樹種本数をきっちりと納品できてほっとしたのが正直なところ」「今回の成功は会の公平性と会員の実行力の賜物」との御感想。今後は「植木産業と会員の発展に向け、緑の効用を伝え緑の普及・啓発に取り組み、若手後継者の育成に一層努めていきたい」と抱負を伺いました。



育成中のヤマグワ



ほ場で育成中のイタヤカエデ



植樹当日 プランター植栽

特集 急増する新害虫 ～チュウゴクアミガサハゴロモ～



最近、右の写真のような白いフワフワしたものを庭木や街路樹等で見たとはいえないでしょうか。これは、チュウゴクアミガサハゴロモ（以下本種）といい、中国原産の外来種です。2017年に国内で発見されて以降、25以上の都府県で発生が確認されています。2024年以降は、国内で農作物への被害が確認され、埼玉県でも2025年に「病害虫発生予察注意報」が発表されるなど近年被害の拡大が問題になっています。



■被害と生態

主な被害は、成虫が細い枝などに白いふわふわしたワックス状の産卵痕を枝内部から表面に残すことです。その結果、植木・苗木生産の現場では、接ぎ木した新芽への産卵被害や枝への産卵痕が多い場合、枝先が枯死するなど深刻な被害が発生しています。本種は、特定の樹種のみだけではなく、多種多様な樹木類などに産卵を行う点も被害の拡大につながっています。

また、成虫の見た目は蛾のように見えますが、本種はカメムシ目のため幼虫・成虫ともに吸汁加害を行い、ベトベトする甘露を分泌します。

本種は年2回の発生と思われ、4月ごろにかけて越冬した産卵痕から一斉に孵化し、6月ごろに成虫になり始めます。7月ごろになると次の世代が孵化し始め、おおよそ10～11月ごろまでにはその世代の成虫が産卵を終え、卵で越冬を行います。

白い幼虫のうちは羽がないため飛び跳ねて移動を行いますが、左上写真の黒灰色の成虫になると羽で飛ぶことが可能になります。

■防除について

現時点では、本種に対する登録農薬がないため、主な防除方法は産卵痕の摘除となります。

冬は、落葉する樹木では産卵痕が目立つようになることから、冬に防除を実施することが効果的です。



緑のコラム バイオ炭

急速に温暖化が進み、夏季の高温時期の延長と冬期の気温の上昇が作物生産に大きな影響を及ぼしています。花植木の生産現場でも病害虫の多発や既存の栽培管理が難しくなるなど、対応が求められています。

このような中、地球温暖化対策計画（2021年10月）では、バイオ炭の農地への施用を、農地土壌吸収源対策として位置付けています。バイオ炭とは、「燃焼しない水準に管理された酸素濃度の下、350℃超の温度でバイオマスを加熱して作られる固形物」と定義された炭のことで、土壌への炭素貯留効果が認められ温暖化対策の1つとされています。バイオ炭の施用には、土壌改良効果があり、土壌の透水性、保水性、通気性といった物理性を改善するほか、土壌を酸性からアルカリ性に矯正したり、リンなどの栄養素を供給したりする効果が期待されます。



当センター施用写真

職員のイチオシ植物

私のおすすめの植物は「シモバシラ」です。シソ科の多年草で学名は、
Collinsonia japonica (Keiskea japonica) この植物の特徴は開花時期が秋ごろでその後地上部は枯れてしまいます。しかし根の機能は生きているため12月から2月ごろにかけて根から吸われた水分が枯れた茎から染み出て凍結して氷の柱を作ります。

氷柱が発生するタイミングとしては、土壌中にある程度水分があつて朝が寒い（気温が氷点下）晴天時になります。最初は茎の上まで氷ができますが茎の水分を吸い上げるところが壊れてくるために株元のみになってきます。

センターでは冬にこの氷の柱を見に来る来園者が多いですが、開花時期の花もきれいなので、その時期もご来園お待ちしております。



氷の柱発生時（十二月下旬撮影）



開花（十月中旬撮影）

《センターの取組み① 果樹園の再整備について》

C9, 10, 11 区画果樹園コーナーの再整備を進めています。「手軽に育てられ、実・花・香りから四季と生長を感じる」をコンセプトに、伐採や新植を中心に約 40 本の果樹の更新や約 40mの通路の新設を職員およびボランティアの協力のもと、令和7年度末の完成を目指して、作業を進めています。完成後は、季節ごとに移ろう花の香り、実の彩りなど、四季の変化を肌で感じながら、果樹の魅力を楽しめる空間を目指しています。そして、果樹園コーナーを通じて、果樹栽培に興味を深めていただきたいと思います。



果樹園（2026年1月現在）

《センターの取組み② 緑化講座の申し込みの電子化について》

当センターの緑化講座や研修会の申込は、これまで電話や窓口で受付していましたが、24時間いつでもどこでもスマートフォンなどで手軽に申込できるよう、令和7年度から「埼玉県電子申請・届出システム」による申込に変更しました。

皆様からのお申込みをお待ちしております。

発行 埼玉県花と緑の振興センター

発行人 所長 九十九 和彦

電話 048-295-1806 FAX 048-290-1012

E-mail h951806@pref.saitama.lg.jp

HP <https://www.pref.saitama.lg.jp/hana-midori/index.html>



センターHP QRコード

